令和４年度　東京都北区立堀船中学校

堀船中だより

令和４年５月　第２号

校長　阿久津　光生
〒114-0004
東京都北区堀船 2-23-20
Tel 03-3911-8817

心身ともに健康にして、国際的視野に立って社会に貢献し、自立した人を育成する。

教育目標　**自ら**学び　**自ら**考え　**自ら**行動できる生徒

《令和４年度 第69回入学式を挙行いたしました》

朝から青空が広がり心地よい陽気の中、69名の新入生を迎え、第69回入学式を挙行いたしました。阿久津の式辞の一部を掲載いたします。

「（前文、挨拶等略）みなさんの中学校生活のスタートにあたり、今日は三つお話をします。一つ目は、中学校三年間で、自分から進んで学ぶ生徒になってほしいということです。（略）二つ目は、思いやりをもち、助け合える生徒になってほしいということです。（略）三つ目は、自分の夢の実現に向かって努力し続ける生徒になってほしいということです。

東京オリンピック・パラリンピックの柔道七十三キロ級で、リオ五輪に続き二連覇を達成した大野将平選手のことを知っている人も多いと思います。大野将平選手は、リオ五輪で金メダルをとった時、派手なガッツポーズをしなかったことなどが世界中から賞賛されました。大野選手の相手を敬う姿勢は、中学校の道徳科の教科書にも掲載されました。

その大野選手を柔道界の絶対王者へと導いた指導者がいます。中学・高校時代の恩師である、世田谷学園柔道部監督の持田治也先生です。持田先生は、数々の五輪金メダリストを輩出した、講道学舎という中学・高校一貫指導の全寮制の柔道私塾で長年ご指導されてきました。先日、その持田先生とお話しをする機会がありました。大野選手について伺ったところ、大変興味深いお話を聞くことができたので、みなさんにもお伝えしたいと思います。

大野選手は、先に講道学舎の門を叩いた二つ上のお兄さんの背中を追って、小学校六年生の時に故郷・山口から上京し、講道学舎の入門試験を受けました。当時の体重は五十キロほどで、周囲に比べて非常に細かったこともあり、入門試合の成績は振るいませんでした。柔道を学ぶ兄が、道場に見学に来ていた母に対して「この様子では無理だから山口に連れて帰った方が良い」と話すほど、全く歯が立たなかったそうです。しかし持田先生は、大野選手の中に光るものを見抜いていました。母の前でボロボロになって泣きながらも、強い相手に何度でも挑戦し続ける姿は、誰もが見せられるものではないと感じたのです。こうして大野選手は入門を許可されました。この日がなければ、現在の大野選手の姿はなかったかもしれません。ある日、持田先生は、大外刈りと内股という、大きな選手が得意とするような技を習得するように大野選手に指導しました。まだ小柄で細身だった大野選手ですが、恩師の言葉を真摯に受け止めて、大外刈と内股の練習に切り替えます。周囲が自分の得意技を磨く中、大野選手は内股、大外刈りの練習をひたすら繰り返して、絶え間ない努力の末に習得していきました。そして高校二年生の時、全国高校総体（インターハイ）の個人戦で見事優勝を果たします。今となっては大野選手の代名詞とも言われる大外刈りや内股という技は、ただ相手を倒すだけでなく、恩師の的確な助言と、己を信じて苦しい練習をやり通した大野選手の努力を示す証なのです。

「継続は力なり」という言葉もあるように、皆さんも新しい生活の中で、大野選手のようにたゆまぬ努力を積み重ね、自分自身を大きく成長させてほしいと願っています。

今紹介した３つのことを常に意識しながら、自分を大切にし、仲間と共に己を磨き、成長させていってください。実りある中学校生活になることを心から期待しています。（以下略）」

《３組 対面式がおこなわれました》

１年生２名に２、３年生の先輩から歓迎の言葉をいただきました。１年生は、礼儀正しくあいさつをしてくれました。２、３年生はとても頼り甲斐があり、１年生も安心して学校生活を送れると思います。３組のみなさんが大変立派な態度で式に臨んでくれたので、心温まる素敵な対面式となりました。

《祝　野球部　北区春季大会３位》

野球の北区夏季大会予選シード権大会が10日（日）に行われました。堀船中・東京成徳中学校の合同チームは、４対３で十条富士見中に勝利し、赤羽岩淵中とは引き分け、１勝１分で見事決勝リーグに進出しました。17日（日）の決勝リーグでは、明桜・滝野川紅葉中には１対５、稲付中には２対３の僅差で、惜しくも負けてしまいました。しかしどちらの試合も内容的な差はほとんどなく、堀船中もゆくゆくは優勝を狙えるチームに成長できると改めて確信しました。とても価値のある第３位です。おめでとうございます。

これからも頑張ってください、応援しています。

北里柴三郎の歩んだ道（3）～内務省の官僚となる～

北里は、明治 16（1883）年 4 月に東京大学医学部を卒業しました。前途洋洋たる青年に対して、地方の医科大学の校長、県立病院の院長等の就職話が数多くありましたが、北里は全て断ります。「ヨーロッパに留学して、病の原因と治療法を突き止める」という、マンスフェルトが示してくれた道を進みたいと考えていたからです。

内務省と大蔵省合同の木造庁舎
【提供　財務省】

そんな北里が選んだのは、内務省衛生局に就職し、官僚になることでした。当時の内務省は、警察や土木、衛生等、国内の行政のほとんどを司る官庁でした。北里が衛生局に勤めることができたのは、東京医学校の校長だった長与専斎が初代局長に就任したことも大きかったようです。

医術開業試験主事として長崎に出張した時の写真
（左が北里）
【提供】学校法人北里研究所北里柴三郎記念室

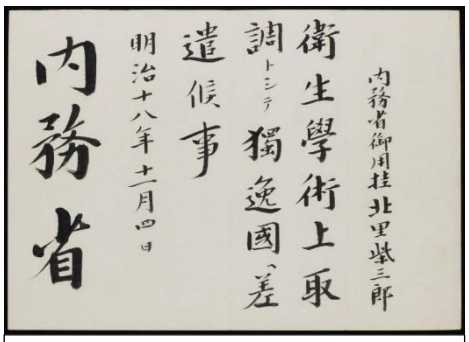
内務省における医者としての北里の最初の仕事は、ヨーロッパの国々がそれぞれ決めている医療関係の制度等についてデータを整理し、分析することでした。熊本の古城医学校ではオランダ語を、東京大学医学部の時にはドイツ語を習得した北里にとっては、うってつけの仕事でした。

職務に取り組み始めた北里でしたが、ドイツに留学していた緒方正規の帰国によって、早くも転機が訪れます。古城医学校の同級生で、東京大学医学部の先輩であり、内務省衛生局の先輩でもある緒方は、ドイツのベルリン大学衛生研究所で最新の細菌学を学んでいました。帰国した緒方は、その知識を日本の医学界に広めるべく、東京大学医学部で教えることになりました。緒方は、内務省東京試験所にて研究室を構え北里を助手として細菌学の手ほどきをします。このことが、北里の運命を大きく変えることになりました。緒方の研究対象は、「脚気病原に関する試験」、「結核牛の解剖」、「狂犬病毒の研究」等でした。緒方の助手として働くことによって、北里は細菌学の道に足を踏み入れることになったからです。実はこの助手指名の裏には、緒方はもちろん、局長の長与の配慮があってのことでした。有望な若手をコッホ流の細菌学の研究手法に触れさせたい、という長与や緒方の想いに支えられて、北里は細菌学の研究に着手します。

そんな北里は、明治 18（1885）年 9 月に長崎で集団発生した原因不明の伝染病の調査において、大きな功績をあげます。当時の長崎は、この伝染病に 4,300 人余りが罹患し、そのうち半数以上が死亡するという大変な状況でした。内務省から調査を命じられた北里は、ただちに現地へと向かいます。到着するやいなや、北里はまず、隔離病院に収容された数十人の患者の便から病原菌を採取すると、これを純粋培養し、顕微鏡で観察しました。最新の知見のもと、北里はこの病原菌を、明治 16（1883）年にコッホが発見したコレラ菌であると結論づけました。これが日本で最初のコレラの菌の検出となったのです。その後、北里は長崎で採取した菌株を東京に持ち帰り、再度検査をしてコレラ菌であることを今一度確かめると、すぐに感染の拡大防止に取りかかります。コレラの治療法がまだ定まっていなかったこの頃において、感染が他の地域に拡大することなく収束できたのは、北里による素早い病原菌の特定と、早期の適切な対処のおかげでした。

一連の北里の対応を、長与局長はしっかりと見ていました。特に、病原菌の特定に至った実験手法の手際の良さと正確さを高く評価し、北里を緒方のようにコッホの下で研究させるべきだと考えたのです。長与局長は、北里のドイツへの留学を内務省に申し入れました。

こうして、明治 17 年（1884）年、北里が胸に抱き続けた念願のドイツ留学は、自ら示した成果によってついに叶えられることになるのです。



ドイツ留学の辞令
【提供】学校法人北里研究所北里柴三郎記念室